

(15) 思い堀(2) おも

むかし、むかし、あつただど。

清水の良く出る郷があつただど。清水の出るところから堰をつくり、田圃に水を引いて、たくさんのお米を作つて暮らしていたんだど。しかし、その郷は大雨が降るといつも大洪水となり、折角の堰もその都度こわされてしまい、農民が大変困つていたんだど。中には、離農者まででたんだど。

その頃、芦名家の家臣で小森備後という人がおつただど。

この人は、農民の難儀を見かねて、殿様に農民の困窮の実情を申し上げた際に、

「大川の水を本郷村の岩崎山の麓から下小松村や中荒井村を経て海津村に、そこから鶴沼川に注ぐ堰をつくり水を流し、田圃の灌漑用水としたらいかがだべ。」